隠国 KOMORIKU 通信 Vol. 5 2018.6.10
The Letters From K.Kayamori in KOMORIKU.

木下牧子の「愛する歌」、愛すべき歌たち

混声合唱においても、女声合唱においても木下牧子さんのアカペラの作品は数多く手がけてきた。「おんがく」「うたをうたうとき」・・・。比較的シンプルで、それでいて色彩的な作品を好んで取り上げてきたように思う。今回の演奏会も同様のコンセプトで組み立てていった。やなせたかしの詩になる「愛する歌」をタイトルとして、演奏会の最後にどーんと全曲演奏という形で据えた。この「愛する歌」から「さびしいかしの木」や「ロマンチストの豚」などが生まれていて、混声合唱でも、女声合唱でも、はたまた男声合唱でも、そして、ピアノ付きでも、アカペラでも、さらに歌曲としてもよく歌われているのだが、10曲全曲を、オリジナルの版で演奏されるのは珍しいのかも知れない。10曲通して演奏すると、30分近くになる。シンプルな、シンプルな曲であるのだが、並べてみるとやなせたかしの心情の吐露、浪漫が透き通るように描き出される。

木下牧子さんの公式ホームページより

◆前半に置いたアカペラ作品について

オープニングはよく知られた「グリーンピースの歌」　コロコロ逃げるグリンピースを追いかける。「おんがく」や「鷗」「夢みたものは」はよく演奏される曲。何度となくこれらの曲を手がけてきたが、やる度に新たな発見もあるわけで、今回の女声アカペラ版でクリアーな音像で音楽に迫りたい。そして、「ほたるたんじょう」。この曲は無伴奏女声合唱組曲「ふくろうめがね」の中の1曲。木下牧子のアカペラ作品における最もドラマチックな曲といえば、混声合唱曲では「ティオの夜の旅」の「祝福」、女声合唱曲ではこの「ほたるたんじょう」をあげる。神々しくもある作品だ。

◆アカペラ作品の後半

コンサートのはじめに置いたアカペラ作品の後半は、アカペラ作品としては少し長めの「散歩」「めばえ」「44羽のべにすずめ」の3曲。場面が変わるごとに曲は展開する。それはまるで映像や風景を見ているようである。

「44羽のべにすずめ」は、あるところに一軒の家があって、その中では44羽のべにすずめが仲よく愉快に住んでいた・・・　そんな物語。歌絵巻のようなにぎやかさだ。豪華でさえもある。「散歩」は、いわゆる詩に作曲されたのではなく、「文章」に作曲されている。まるで本当に散歩をしているかのように街の情景が見えてくる。そして、散歩している時の心情も。

◆「C.ロセッティの4つの歌」と「愛する歌」

声だけでつくり出すアカペラは、豊かな響きを醸しながらも、音楽の本質へ本質へと向かう。一方、オーケストラと同じ音域を持つ万能の楽器ピアノとともに書かれた作品は、作品の風景や背景、そして、揺れ動く心の中までも、広がりをもって描き出す。アンパンマンを産み育てたやなせたかしが若い頃から書きためたシンプルな詩をひたすらにシンプルに書き上げた「愛する歌」。もう一つの「C.ロセッティの4つの歌」は半ば隠棲をしていた二階の小部屋から見える限られた風景、そして、やがて迫りくる死・・・。それらと向かい合う中で揺れ動く心の中を、時には生を謳歌する初夏の歌として、時には、夜が明けるのを待ちわびるかのような、夢の中の風景のような音楽として書き表している。「C.ロセッティの4つの歌」も「愛する歌」も生きるということへの根源的な問いなのであろう。「愛する歌」はフランツ・シューベルトの「冬の旅」、「C.ロセッティの4つの歌」はグスタフ・マーラーの「さすらう若人の歌」と重ねてみるのは過大評価といわれるかも知れないが、対比的なようにも映る2つの曲には、ロマンティシズムがその中に横たわっている。

◆ご感想などは hane2883@gmail.com まで